

特集 新春市長対談

人・まちの明日を語る



浅利敬一郎

豊中市長



山田洋次

映画監督・脚本家

家族の強い絆、下町の人情、若者が抱える不安と希望——。
豊中市出身で日本を代表する映画監督・脚本家の山田洋次さんは、
常に人に焦点をあて、生きる力や切ない思いなどを描き、
世の中に大きな感動を届けてきました。
新しい年を迎えるにあたり、現代の人やまち、
そして将来について浅利敬一郎市長と語り合いました。



生家に現在お住まいの人に玄関前で転んだエピソードなどを懐かしく話す山田監督



平成26年6月に生家のある中桜塚を訪れました

生家の面影を 作品に投影して

浅利市長 いつも山田監督の作品を楽しく見ています。平成26年（2014）には豊中の生家にも来ていただきました。

山田監督 僕が生まれたのは、昭和6年（1931）。豊中のような都市でそのころの家屋が残っているというのは、奇跡のようですね。ほとんど当時と変わらない姿を見て、感動しました。

浅利市長 大きな三角形の屋根が印象的なお家ですね。

山田監督 まだ赤ん坊だったころの写真が残っています。おとし公開した「小さいうち」に出てくる大きな屋根を持つ家は、その写真からイメージが浮かびました。

浅利市長 そうでしたか。映画の中でとても効果的に登場します。豊中から山田監督を応援しようと、市民の皆さんによる「とよなか山田会」も発足しました。

山田監督 出生地からの応援をありがたく受け止めています。豊中の家から僕の歴史は始まったんだとつくづく感じています。

家族と人のつながりに 焦点をあてる

浅利市長 監督の作品はどれも人と人との

人は人の中でこそ成長する。
まちはそのために
何ができるのか。





山田洋次ミュージアムにはデビュー作のフィルムやオブジェなどが展示



山田洋次ミュージアム（東京都葛飾区）で、山田監督自ら展示の説明



映画監督・脚本家 山田 洋次さん

昭和6年(1931)9月豊中市生まれ。昭和29年松竹に入社し、昭和36年「二階の他人」で初監督。昭和44年の「男はつらいよ」は大ヒット作となり、後に全48作と特別編のシリーズとなる。そのほか、第1回日本アカデミー賞を多数の部門で受賞した「幸福の黄色いハンカチ」をはじめ、「たそがれ清兵衛」「東京家族」「母と暮せば」など数々の作品を世に送り出している。平成24年(2012)文化勲章受章。

関わりが丁寧に描写されており、ぐっとストーリーに引き込まれます。特に家族関係の描き方も山田監督作品を語るにおいて欠かせないポイントと思っています。今年は、家族をテーマにした「家族はつらいよ」も公開されるとか。

山田監督 「家族はつらいよ」は、現代の一般的な家庭を取り上げた喜劇。70歳代のお父さんに降って湧いたある問題をきっかけに、家族それぞれの側面や関係が浮き彫りになります。

浅利市長 大ヒット作「男はつらいよ」でも、主人公の寅さんと妹のさくらさんなど周りの人たちの間にある温かい愛情やときには切ない感情が、心に響きました。

山田監督 あの映画に出てくる人と、家

**いまあらためて
地域のつながりを**

山田監督 隣近所でのお付き合いも変わってきましたね。

浅利市長 昭和30年代初めのまちでは、隣近所で何かと助け合い、協力し合って暮らしている空気をもっとあったように感じています。

山田監督 昭和の初期は、八百屋や酒屋、米穀店など個人で営んでいる店が地域にたくさんあったはずです。店主と客は顔なじみで、子どもたちはそういったところに頻繁にお使いに行っていました。そして、店

族の関係は、基本的に幸せなものです。寅さんはしょっちゅう故郷の悪口を言い、叔父とけんかしては飛び出していくのだけど、根底では深い愛情で結びついている、恵まれたいい関係なのです。

浅利市長 今は家族よりも個人で過ごす時間や空間が優先され、かつてのような家族のあり方やつながりは時代とともに変化してきました。それでも家族のつながりの大切さは変わりませんね。

山田監督 昭和30年代に日本の経済が成長するに伴い、家族の関係が変わり始めたように思います。かつて映画で表現してきた、平穏な暮らしがあればいいのという思いを僕はずっと抱いています。



文化芸術センター開設プレ事業 映画と文化を考える集い

山田洋次監督の最新作「家族はつらいよ」を全国公開に先駆けて上映します。あわせて、とよなか山田会代表・能登宏之さんと松竹常務取締役・大角正さんが地域や人のつながりの大切さについて話し合います。

▶とき＝2月10日(水)18時30分 ▶ところ＝アクア文化ホール(曾根東町) ▶定員＝470人 ▶申込み＝電話で魅力創造課☎6858-2863。市ホームページから申込み可。先着順



平成28年(2016)3月12日 全国ロードショーの「家族はつらいよ」の撮影風景
©2016「家族はつらいよ」製作委員会

「家族はつらいよ」

結婚50年を迎える夫妻とその一家に起こる騒動を温かな笑いと涙で描く喜劇映画。

【出演】橋爪功、吉行和子ほか

のおじさんやおばさん、お兄さん、お姉さんたちからよく声を掛けてもらい、いろいろなことを教わったものです。近所の人や店の人など、家族以外の大人が子どもたちを見守る環境が昔は自然とできていました。その世界がなくなりつつあるのは、とても寂しいことだと思います。

浅利市長 かつてのような近所付き合いは少なくなってきましたが、阪神・淡路大震災や東日本大震災でも、地域のつながりは大きな役割を果たしました。そこで豊中市は、小学校区を単位にした地域づくりを進めています。防災や安全、子どもや高齢者の見守りなど、地域の課題を市民の皆さんが主体となって解決していけるよう、さまざまなかたちで支援しています。

山田監督 昔は当たり前にあった環境を、現代は意図的につくっていく必要もあるのですね。地域参加へのはつきりとした意思を一人ひとりが持つべき時代になったのだと思います。

子どもたちが多くの大人と ふれあえるように

浅利市長 豊中市は今年、市制施行80周年を迎えます。将来に向けたまちづくりを見据えると、その中心を担う子どもや若者たちの成長について、大人がどう関わっていくかも今後考えていくべき点です。

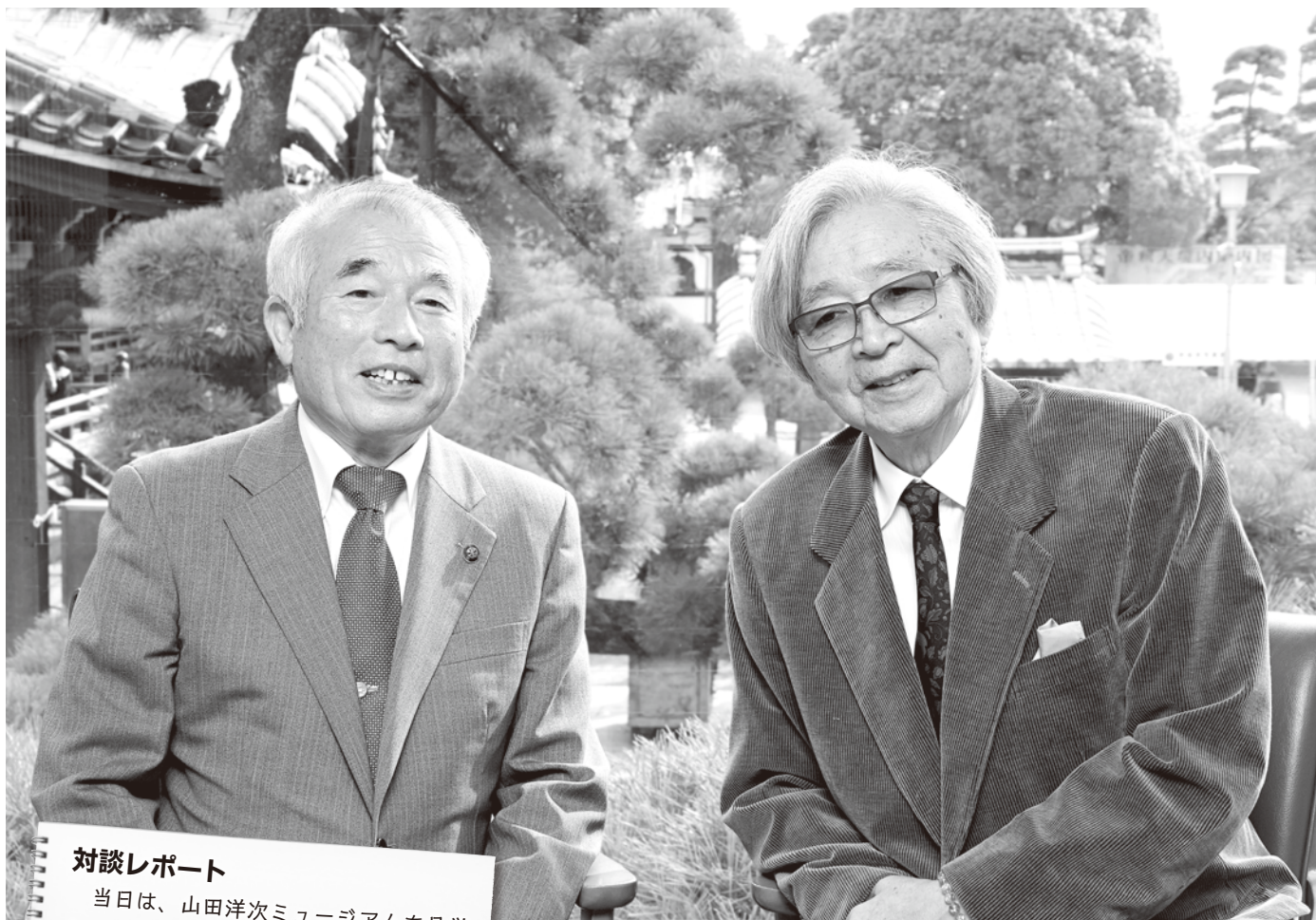
山田監督 現代では、若い世代に関する難しい課題が山積しています。

浅利市長 子どもや若者の健やかな成長には、さまざまな活動やいろいろな人との出会いが大切だと考えています。例えば豊中市は市内に大阪音楽大学や日本センチュリー交響楽団があることなどから、「音楽」をキーワードの一つにした取組みを行っています。音大生が小学校や中学校で演奏を披露したり、児童に楽器の演奏方法を教えたりますなどで豊かな心を育みます。

山田監督 専門の分野で学ぶ先輩と交流できるのはいいことです。子どもの成長過程において年上の人とふれあう機会があることは、非常に大事です。いまは、子どもに「将来どんな人になりたい?」と質問すると、サッカー選手や医者など、憧れの職業で答えが返ってきます。一個人を示して「○○さんのようになりたい」とは言わない。それだけ人格として目標になるような大人が子どもたちの周辺にいないのでしょうか。

浅利市長 になりたい職業の目標があるのはいいけれど、少し残念ですね。

山田監督 「男はつらいよ」で、寅さんのおいっ子の満男が「近頃伯父さんを見直してゐるんだ」と言うシーンがあります。満男は小学生のとき、もっと立派な人ならいいのに寅さんを嫌っていました。しかし、高校生になった彼は車寅次郎がなかなか大



対談レポート

当日は、山田洋次ミュージアムを見学し、映画の撮影でもおなじみになった柴又帝釈天の一室で対談を行いました。「市長さんと寅さんが出会って仲良くなるような映画があったら面白かったですね」と山田監督が話されるなど、終始和やかな雰囲気にもまれた対談になりました。

人だと思ふようになって、人生相談を持ちかけたりします。そんなふうには価値観が変わるところに満男の成長があるのです。

浅利市長 寅さんは、地位やお金で計れない魅力あふれる人。困っている人を助けたという愛情をいっぱい持っています。満男くんは、そんな寅さんの良さに気付いたのでしょう。

山田監督 苦しんだり悩んだりしている人は、なんとか力になろうとする寅さんの気持ちだけで、本当に救われます。「大きくなったらあんな人になりたい」と尊敬できるような大人が、一人でも二人でも近くにいるべきだし、子どもはそんな価値観を持って育ち、判断する力を身に付けるべきだと思います。そのためには、日常的に少しでも多くの大人とふれあう機会がほしいですね。

浅利市長 同感です。子どもや若者たちの成長に良い影響を与えられるような出会いやふれあいを今後のまちづくりの中で創造していけたらと思います。子どもや若者はもちろん、豊中に住む全ての「人」が主役となるようなまちづくりを、市制施行80周年を節目にますます進めていきたいと思っています。今日は大変貴重なお話を伺いました。山田監督にはより一層のご活躍を期待しています。また、豊中を故郷として温かく応援していただければと思います。今日は本当にありがとうございました。